

⑩ 日本国特許庁(JP)

⑪ 実用新案出願公開

⑫ 公開実用新案公報(U) 昭60-105715

⑬ Int.Cl. <sup>4</sup>	識別記号	庁内整理番号	⑭ 公開 昭和60年(1985)7月18日
E 04 C 2/30		6730-2E	
E 04 B 1/70		7904-2E	
E 04 C 2/04		6730-2E	
E 04 F 13/14	1 0 2	7130-2E	審査請求 未請求 (全 頁)

⑮ 考案の名称 無機質壁板

⑯ 実 願 昭58-202823

⑰ 出 願 昭58(1983)12月23日

⑱ 考 案 者	阪 岐	郁 夫	大阪市浪速区敷津東1丁目2番47号 久保田鉄工株式会社 内
⑲ 考 案 者	木 曾	誠	大阪市浪速区敷津東1丁目2番47号 久保田鉄工株式会社 内
⑳ 考 案 者	藤 戸	正 美	大阪市浪速区敷津東1丁目2番47号 久保田鉄工株式会社 内
㉑ 出 願 人	久保田鉄工株式会社 大阪市浪速区敷津東1丁目2番47号		
㉒ 代 理 人	弁理士 清水 実		

明 細 書

1. 考案の名称

無機質壁板

2. 実用新案登録請求の範囲

- (1) 長さ方向に連続する板状体の表面が、巾方向に沿つて裏面平面に対し傾斜する一又は二以上の鋸齒状傾斜面とされ、かつ、前記裏面平面には表面の鋸齒状傾斜面と対応して巾方向に沿い深さが深くなる凹溝が長さ方向に連続して設けられており、前記板状体の巾方向両端縁には断面形状が互いに雌雄関係をなす係合段部が設けられて成ることを特徴とする無機質壁板。

3. 考案の詳細な説明

この考案は無機質壁板に関し、詳しくは南京下見張りに用いられる無機質壁板に関する。

従来、壁面を構築する場合の施工例として、第1図(イ)、又は(ロ)に示すように、断面が鋸齒状とされた壁板  $A_1$ 、 $A_2$  をその巾方向両端縁に形成した係合段部  $B_1$ 、 $B_2$  により順次接合していき、南京

下見張りの壁面を構築することが知られている。

この種施工例に使用される無機質壁板  $A_1$ ,  $A_2$  は、いずれも図示のように、壁板の裏面  $A_3$ ,  $A_4$  が平面とされているため、壁下地面  $\square$  に固定した場合、裏面平面  $A_3$ ,  $A_4$  が、壁地面  $\square$  に一様に接触し、この部分に結露を生じるようなことがあると毛細管現象により排水されにくく、また、通風もされないため、乾燥もされず、壁下地面に霉が発生したり、あるいは湿気により壁板表面にエフロレッセンスが生じたり、又は壁下地面を腐蝕させたりすることがあつた。

この難点を解消するために、例えば壁板  $A_1$ ,  $A_2$  裏面の要所にスペーサを介挿し、このスペーサ（図示せず）を介して壁板  $A_1$ ,  $A_2$  を壁下地面に固定することによつて隙間が出来るように取付けることも考えられるが、重量の嵩む無機質壁板をこのような手段で取付けるには、スペーサの強度並びに壁下地面との取付強度を充分にする必要があり、施工が非常に面倒となり実用的でないといった問題がある。

この考案は上記欠点に鑑み、従来と同様の取付手段で壁面構築が可能でありながら、壁板裏面と壁下地面間との間に同時に通風用としての隙間の形成が可能であり、結露、あるいは湿気の滞溜を十分に防止し得る無機質壁板を提供することを目的としてなされたものであつて、長さ方向に連続する板状体の表面が巾方向に沿つて裏面平面に対し傾斜する一又は二以上の鋸齒状傾斜面とされ、かつ、前記裏面平面には表面の鋸齒状傾斜面と対応して巾方向に沿い深さが深くなる凹溝が長さ方向に連続して設けられており、前記板状体の巾方向両端縁には断面形状が互いに雌雄関係をなす係合段部が設けられて成ることを特徴とするものである。

次に、この考案を実施例により説明する。

第2図(1)、(2)は、この考案の実施例の斜視図、第3図(1)、(2)は、取付状態を示す断面図である。

この考案の無機質壁板Gは、主として繊維補強セメントによる押出成形体とされ、長さ方向Lに連続する板状体1の表面1Aが、巾方向Wに沿つ

て、裏面平面 1 B に対し傾斜する一（第 2 図(i)）又は二以上（第 2 図(ii)）の鋸齒状傾斜面 (1A) とされ、かつ、裏面平面 1 B には、表面 1 A の鋸齒状傾斜面と対応して巾方向 W に沿い深さ d が深くなる凹溝 2 が、長さ方向 L に連続して設けられており、前記板状体 1 の巾方向両端縁 1 C, 1 D には断面形状が互いに雌雄関係をなす係合段部 3 A, 3 B が設けられて構成されている。

上記実施例で係合段部 3 A, 3 B の形状として、いわゆる合挽り接合のものを示したが、第 4 図(i) に示すような本実接合、又は第 4 図(ii) に示すような接合構造等、壁板の用途に応じ任意の接合用段面となし得ることは言うまでもない。

そして、この考案の無機質壁板 G を壁下地面 4 に取付けていく場合、従来と全く同様の手段により取付けていくのみで良く、このとき、壁板裏面 1 B と壁下地面 4 表面との間には凹溝 2 による隙間 3 が出来、従つて、例えば壁下地面 4 が平面状をなす面であつても、通風路が形成され、結果あるいは湿気の滞留が有効に防止されるのである。

なお、無機質壁板 G は、凹溝 2 の分だけ、重量も軽くなるため、取付強度の点でも有利である。

また、無機質壁板 G は使用に供されるまでの間は、第 5 図に示すように、互いの表面 1 A 同志を重ね合わせて二枚一組とし、これを幾組か重ね合わせることにより保管、あるいは運搬されるが、この場合においても、凹溝 2 が通気孔を形成するため、保管中における結露、吸湿も防止でき、さらには、この凹溝 2 により形成される空洞 S' にこれと断面形状をほぼ等しくしたダンボール製筒 5 を差し込めば重ね合わせた壁板同志の横すべりも防止出来、荷崩れ防止にも効果がある。

また、上記重ね合わせ状態において、特に表面 1 A の傾斜面が第 5 図に示したように二以上の鋸歯状傾斜面を有した壁板 G の場合、壁板表面の露出表面のうち、 $P_1$ 、 $P_1$  を等しくする関係上、一方の係合段面 3 A (雄段面) が突出し、これが他物との衝突などにより損傷されるおそれがある。このため、第 6 図に示すように、壁板表面 1 A の露出表面のうち、一方の係合段面 3 A (雄段面) の設

けられる表面の全体巾を、係合段面 3A, 3B の重なり巾を第7図に示すように Q としたとき、 $P_1 + Q$  とし、これを他方の傾斜表面の巾  $P_2$  と等しくしておけば、重合した際、突出部が出来なくて都合が良い。

この場合、第7図に示すように傾斜表面の巾が、一方は  $P_1$ 、他方は  $P_2$  となり、 $P_1 \neq P_2$  ( $P_1 + Q = P_2$ ) であることより、露出面 1A の巾に広狭が生じるが、係合段部の重なり巾 Q は壁板 G の露出表面の巾に比し僅少であり、また、壁板表面にストライプ模様等を設ければ殆んど目立たなくなるから、外観上の不都合は全く生じない。

この考案は以上のように構成されているので、壁下地面上に取付けた場合、裏面の凹溝によつて壁下地面との間に長さ方向に連続した通風路が形成され、従つて壁板裏面が湿潤するようなことがあつても速やかに乾燥されやすく、エフロレーシオンの発生や壁下地面の腐蝕が良好に防止でき、また、一様断面の形状をなすから、押出成形によつて製造も容易であり、安価に提供できるなど種

々の実用的効果を有する。

#### 4. 図面の簡単な説明

第1図(イ)，(ロ)は従来例の平面図、第2図(イ)，(ロ)はこの考案の実施例の斜視図、第3図は(イ)，(ロ)は取付状態を示す断面図、第4図(イ)，(ロ)は他の実施例の要部断面図、第5図は実施例の積重状態を示す断面図、第6図，第7図は他の実施例の断面図である。

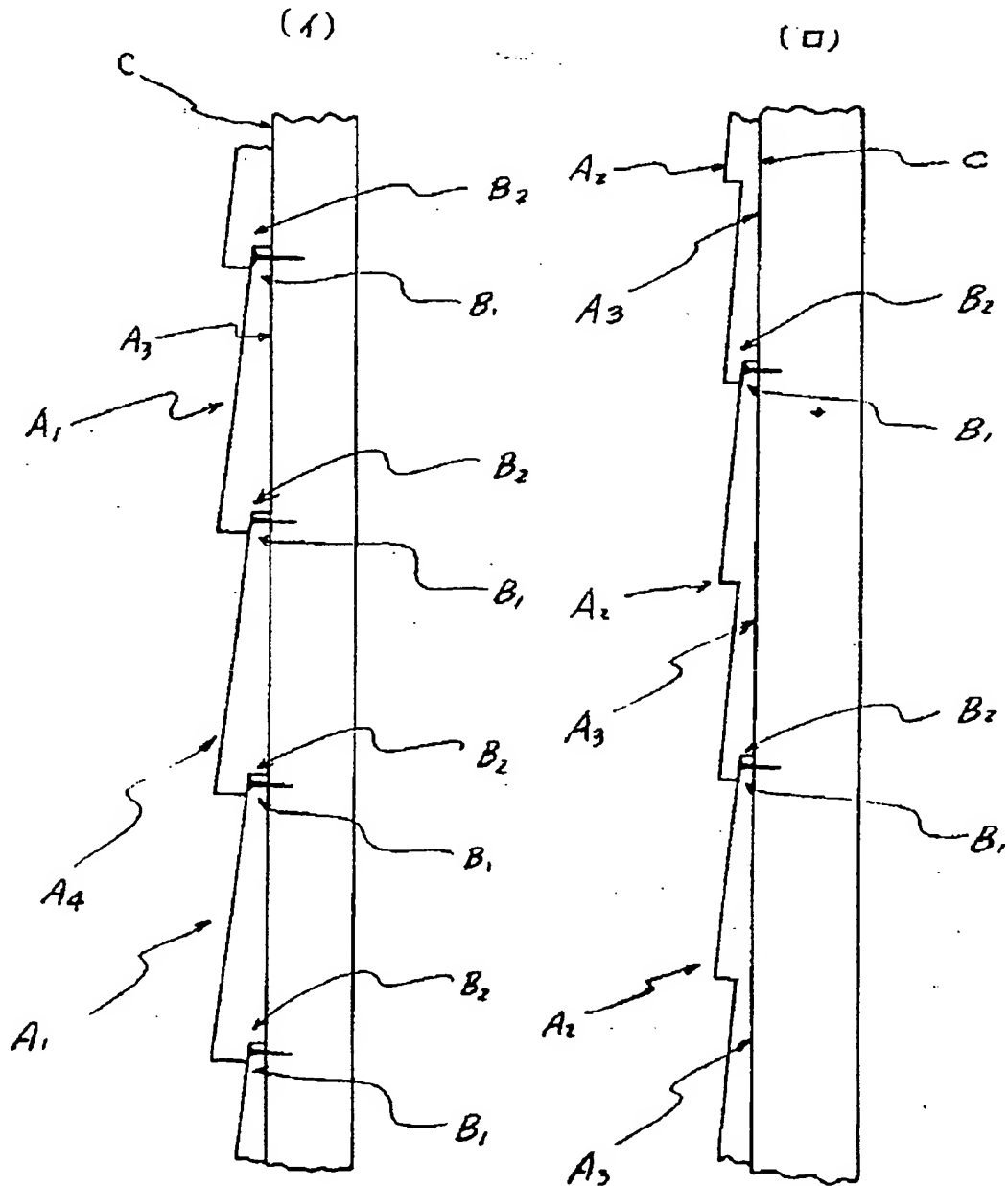
G…無機質壁板、1…板状体、1A…表面、  
1B…裏面、1C，1D…巾方向両端縁、2…凹溝、  
3A，3B…雌雄関係をなす係合段部、L…長さ方向、W…幅方向。

代理人 弁理士 清水





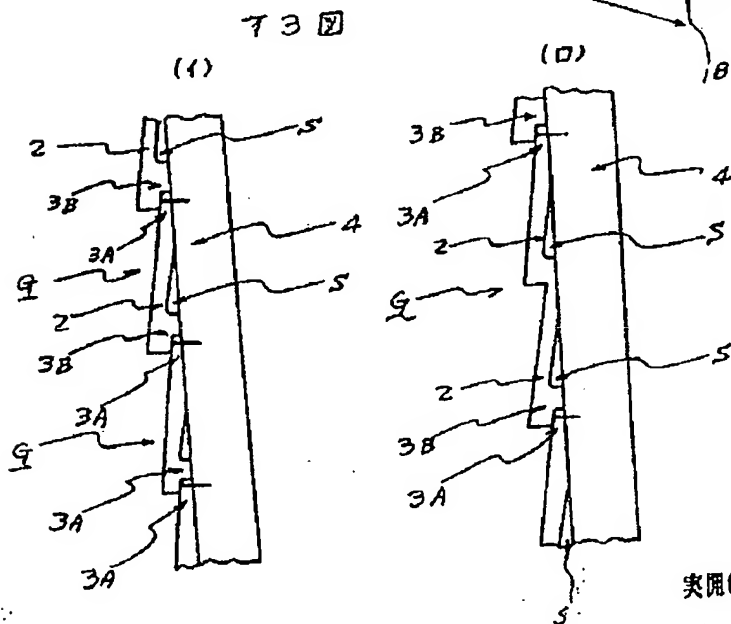
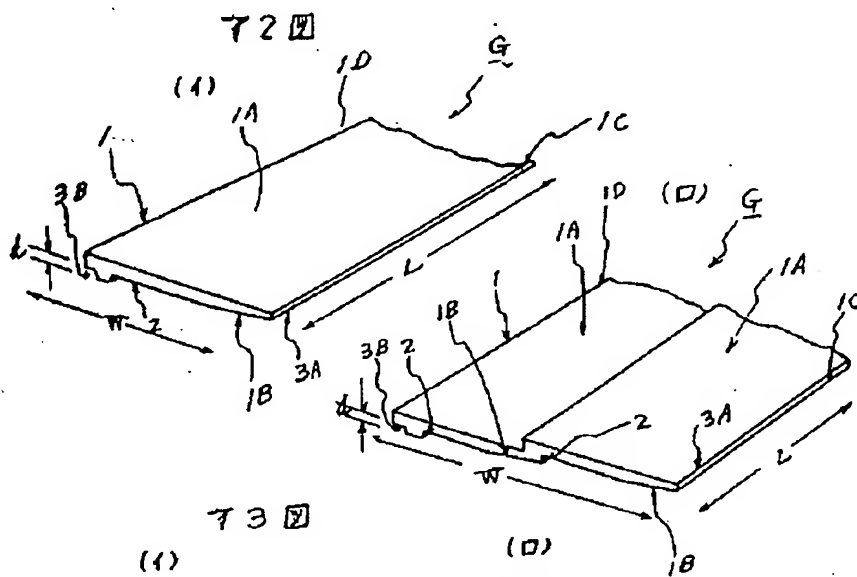
図 1



136

実開60-105715

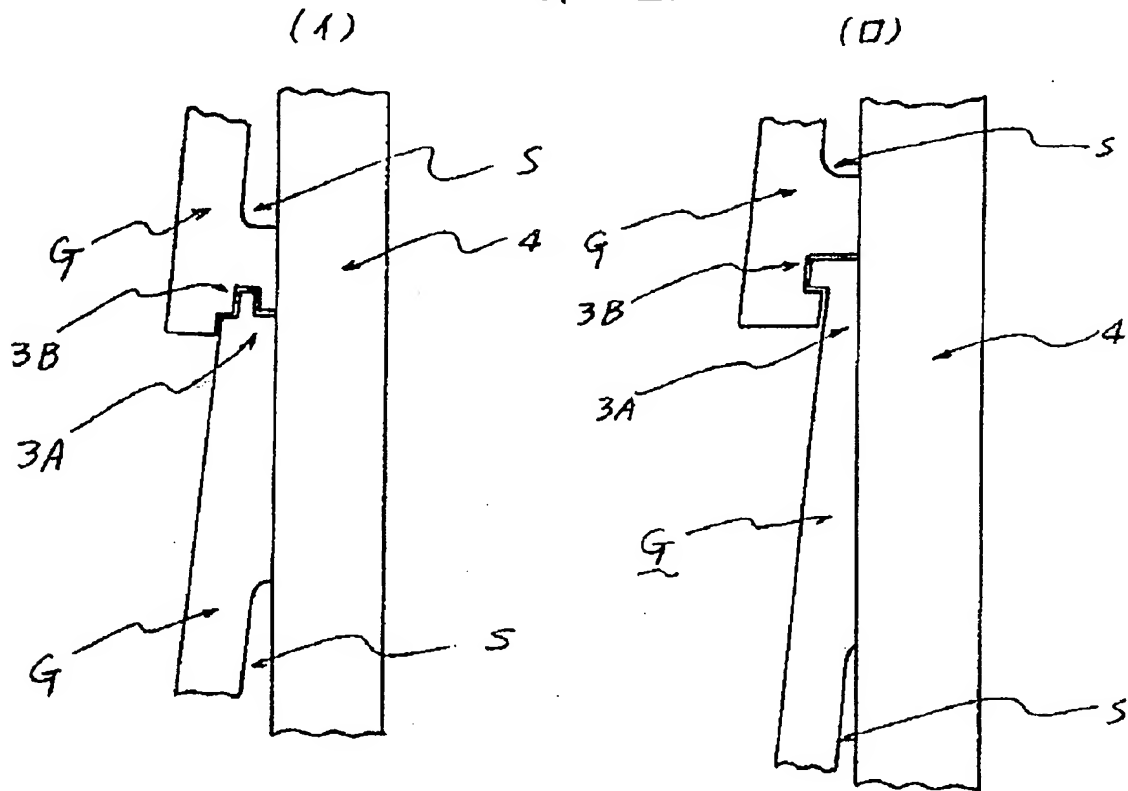
代理人 弁理士 清水 実



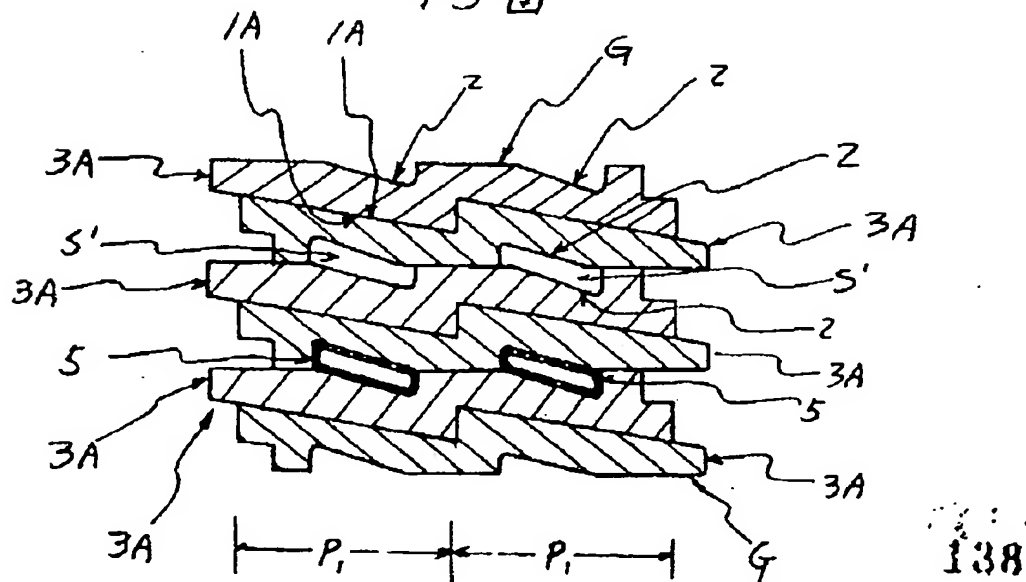
147  
 奥图60-105715

代理人 升理士 清水 奥

第4図



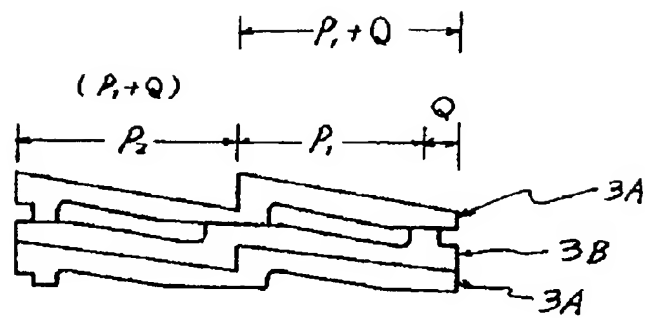
第5図



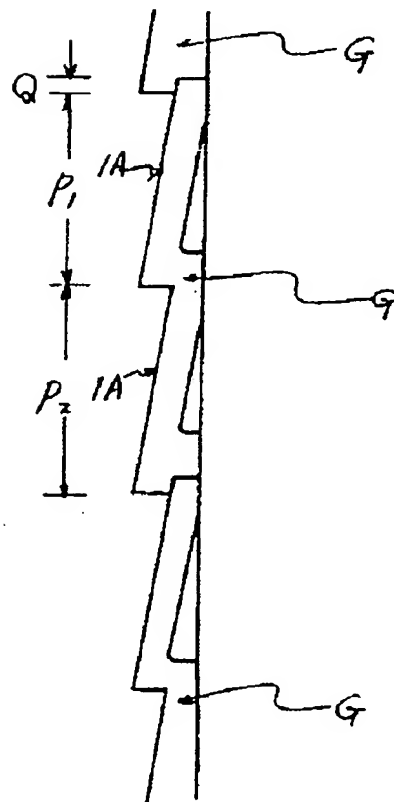
実開60-105715

代理人 弁理士 清水 実

76 图



77 图



139

実開60-105715

代理人弁理士清水実